

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	がん動物看護ケアの実践に役立つ標準動物看護計画の作成 —愛玩動物看護師の誕生に向けた取り組み—
キーワード	① 愛玩動物看護師、②がん動物看護、③標準看護計画

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	オノザワ エリ 小野沢 栄里
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学臨床部門 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学臨床部門 講師
プロフィール	2017年3月に日本獣医生命科学大学大学院獣医保健看護学専攻博士後期課程を修了し、同年同大学獣医保健看護学臨床部門に着任。大学専任教員として学生たちへの指導を行っている他、付属動物医療センターでは動物看護師として腫瘍科に従事しており、日々動物たちとご家族に寄り添ったケアの実施を心掛けている。研究者としては臨床動物看護学やグリーフケアに関する研究を行っている他、がん治療に関する基礎研究も行っており、後者に関しては学内外において研究費を獲得している。また、動物看護系の学会等で2回受賞歴があり、動物看護学の発展に向けて日々研究を行っている。

1. 研究の概要

獣医領域において、がんは犬の死亡原因第一位であり、猫においても死亡原因の上位であるため、がん動物看護の標準化は最も需要があると考えられる。動物看護領域において標準的な看護計画ができれば、多くの動物病院で活用でき、その結果動物看護の高い質を補完した一貫した動物看護を実施することができる。そこに看護対象の個別性を考慮することで、「**標準化された看護計画+個別性=1頭の看護動物およびその飼い主にのみ適応される質の高い看護ケア**」が提供可能となる。また、動物看護の標準化によって、しっかりと系統的な計画が立てられ、その計画が看護動物にとって適切であったか等を看護実践後に評価することができ、評価を元に新たな看護計画の立案や別の看護動物のケアに活かすことができる。動物看護を実践することは、情報収集→アセスメント→問題点の抽出→動物看護計画の立案→実践および評価という、いわゆる動物看護過程の一連の流れを看護動物が今起こっている問題が解決されるまで続けられる。動物看護過程を考えるにあたり、標準化された看護計画があることで、スムーズに計画を立てることができるようになるため、時間的な面においても動物看護業務の効率化が図れると考える。

そこで本研究では、がんを罹患した犬猫と飼い主、それらを看護する動物看護師に焦点をあて、以下の点について、調査することとした。

- ① がんを罹患した犬猫の飼い主のニーズおよび動物看護師のがん動物看護の実践内容に関する調査
- ② がん動物看護における標準動物看護計画の作成

2. 研究の動機、目的

現在、獣医療のニーズが高まる一方で、民間資格の動物看護師が約2万人にとどまっており、安全でより良い獣医療を保証するためには、動物看護師の公的資格化が必要と考え、2019年2月には超党派による「愛がん動物を対象とした動物看護師の国家資格化を目指す議員連盟」が発足した。同年6月21日、獣医師の指導下において獣医療の一部を担える業務独占と名称独占を備えた「**愛玩動物看護師法**」が成立し、動物看護師の国家資格化が正式に決定した。

医学領域において看護師は、役割や業務内容は業務独占によりはっきり区別されており、患者に対する看護ケア【齋田ら、日がん看会誌、2009年、第23巻1号、p.53-60】や患者の家族に対する看護ケア【内田ら、保健医療社会学論集、2012年、第22巻2号、p.66-77】など、多くのエビデンスのもと、日々の看護ケアを実践している。看護を実践するにあたり重要なことは、高い質で共通した看護ケアを実践できることであり、そのためには標準化された看護計画（**標準看護計画**）が必要となる。臨床現場で働く看護師は、この標準看護計画から導き出される看護計画と患者や家族のバックグラウンドを考慮した**個別性を重視した看護計画**を立案する。しかし、獣医領域において動物看護の標準化はされておらず、標準動物看護計画は存在していない。動物看護の標準化に関する研究がないため、動物看護において一定の質を担保することが難しいのが現状である。近年、質の高い獣医療を求める飼い主が増えているからこそ、動物看護師のニーズもより高まると言われている。そのため、動物看護の標準化をすることは、ペットにも飼い主にも一定の質を担保した動物看護ケアを実践することを可能とし、多くの動物看護師が利用する有用なツールとなる。そこで本研究は、国家資格である愛玩動物看護師の誕生に向けて、動物看護ケアの実践に役立つ標準動物看護計画の作成を目的とした。

3. 研究の結果

① 飼い主のニーズを調査および動物看護ケアの内容を比較

本研究では獣医学領域において罹患率の高い、リンパ腫に焦点を当て、リンパ腫の治療期にある犬および猫を対象とした。また、治療方法は抗がん剤を用いた化学療法であり、外来で単剤療法および多剤併用療法を行っている場合とした。

10名の飼い主に、がんの動物と暮らす上で必要なニーズに関する調査を行ったところ、「自宅での過ごし方」や「動物との関わり方」を知りたいと思っていたほか、「抗がん剤や副作用に対する不安」や「今後起こり得る体調の変化やQOLの低下に対する不安」といった、治療やがんに対する漠然とした不安があり、これら不安を誰かに聞いてもらいたいという思いがあることが明らかとなった。

次いで、20件の診療記録や動物看護記録を回顧的に調査し、動物看護師が行っているケアの内容を明らかにした。全ての症例において、抗がん剤投与前の検査として、一般身体検査に加え、血液検査にて血液性状の確認および、超音波検査やレントゲン検査にて転移の有無を確認していた。動物看護師が関わる業務として、血液検査用検体の処理やレントゲン検査、超音波検査時の補助、抗がん剤投与の準備から投与終了までの物品準備や動物の保定を行っていた。投与終了後は使用した物品の片づけと、留置針抜去後の止血確認を実施していた。動物の状態の観察は問診時から最後の説明時まで一貫して行われていた。また、全ての飼い主に対してではないが、待合室にて飼い主と話す機会を設けていた。コミュニケーションをとる中で、飼い主から治療中の動物の様子に関してや今後の見えない将来に関する様々な不安、自宅での排せつ物等の処理方法といったケアに関する確認、副作用発現時の対処法についての発言が多く認められた。

これら結果より、動物看護師として来院時は抗がん剤投与をスムーズに行うための補助に加え、動物の状態や行動の観察を行うこと、そして飼い主が不安を表出しやすい環境作りが必要であると考えられた。また、飼い主に対して自宅でのケアや過ごし方に関する教育指導が必要であると考えられた。

② がんを罹患した犬猫における、標準動物看護計画の作成

本研究では外来で来院した動物および飼い主を対象として標準動物看護計画を作成した。がん看護コアカリキュラムや標準看護計画の図書*を参考に以下のように計画を立てた。

*がん看護コアカリキュラム 日本版 医学書院 一般社団法人日本がん看護学会教育・研究活動委員会コアカリキュラムワーキ

ンググループ編

* 標準看護計画第 3 版 臨床でよく出会う看護診断と潜在的合併症 照林社 編著: 矢田昭子、秦美恵子 編著: 島根大学医学部
附属病院看護部

* 日本小児がん看護学会 小児がん看護ケアガイドライン参照 [日本小児がん看護学会](http://www.jksn.jp) 》 [小児がん看護 ケアガイドライン](http://www.jksn.jp)
(sakura.ne.jp) (参照日: 令和 3 年 12 月)

< 動物看護目標 > (優先順位は適宜変更する)

- #1: 動物が抗がん剤投与を安全・安楽に受けることができる
- #2: 飼い主が不安の感情を表出できる
- #3: 飼い主が自宅で必要なケア内容を実行できる
- #4: 飼い主が自宅で適切に曝露対策を行うことができる

< 動物看護計画 >

#1

- ・ 安心安全に抗がん剤投与を受けられる環境を提供する
- ・ 抗がん剤投与前から投与後まで、動物の行動や状態の観察を行う
- ・ 抗がん剤投与に伴う安全管理を実施する

#2

- ・ コミュニケーション技法 (傾聴、共感、反復など) を用いて、飼い主が不安を話せるように関わる
- ・ 不安を表出しやすい環境の調整を行う
- ・ 動物や飼い主を思いやる態度で寄り添い、飼い主の状況に合わせて対応する

#3

- ・ 自宅での必要なケアに関する情報をどの程度理解しているか確認する
- ・ 飼い主が何を知りたいのか、療養上で困っていることはないか確認する
- ・ 副作用についてどの程度理解しているか確認する
- ・ 家庭での家族の役割やケアの参加の程度を確認する
- ・ 必要に応じ、獣医師からの説明を再度聞く機会を設ける

#4

- ・ 抗がん剤治療中の動物と暮らす家族の曝露対策について、必要な教育的支援を行う
- ・ 排泄物や嘔吐物の処理方法について理解しているか確認する
- ・ 抗がん剤の毒性について過度に恐怖心を抱いていないか確認する

本研究の今後の展望として、作成した標準動物看護計画を実際の現場で運用し、使用感等を確認するとともに、より良いものへ改善の必要があれば検討する。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を実施している過程において、動物看護学と看護学の発展に関して大きな差を改めて感じた。動物看護の領域において、標準動物看護計画が用いられている事例が少ないのが現状である。そのような中で本研究を実施できたことは、一貫したケアを実施することへの一助となると考えられる。このような一歩が今後の動物看護学の発展に役立つことを期待する。動物看護領域の研究報告は事例研究も含めて少ないため、エビデンスに基づくケアを行うために今後も引き続き研究活動に力を入れていきたいと思う。2023 年 2 月に第 1 回国家試験が行われ、愛玩動物看護師が誕生する。今後愛玩動物看護師のニーズは高まることが期待され、本研究実施者自らも動物看護学の発展に貢献したいと考える。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、本研究遂行のためにご支援賜りましたこと深く感謝申し上げます。本研究は飼い主様へ調査協力をお願いする必要があったため、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中での研究の遂行は困難を要することもございましたが、2021年度も引き続き研究継続が可能となり、本研究成果を出すことができました。女性研究者に特化した支援は少ないため、今回このような機会をいただくことができ、研究者としてさらなる経験を積むことができました。優秀な女性研究者は多数おりますので、次なる女性研究者に向けて引き続きご支援いただけますと幸いです。